

曲目のこと

尾崎 正峰

W.A. モーツァルト (1756~91) 歌劇「魔笛」序曲 KV.620

「魔笛」の台本はドイツ語で書かれています。当時、台本はイタリア語というのが一般的でしたのに、なぜでしょうか？

直截な答えとしては、「当時、イタリア語の素養は貴族や上流階級の教養であり、普通の人にも理解できるようにとドイツ語で書かれた」というところでしょうか。

これだけでは分かったような分からないような感じではないかと思えますので、その「背景」について少しふれておきますと、「魔笛」は、シカネーダーという少々怪しげな人物が率いる旅回りの一座のための書かれました。1791年9月30日に初演が行われたヴィーデン劇場が建っているのはウィーンの城門の外、いってみれば“場末”の劇場で、宮廷歌劇場などと比べるべくもない格の低いものでした。こうした劇場（こや）に集まってくるのは中流程度の市井の人々であり、イタリア語とは無縁の生活を送っている人々でした。そのため「誰にでも分かる日常の言葉で」ということでドイツ語で書かれたというわけです。

そのためでしょうか、この作品は今でこそ「歌劇」と称されますが、当初、ドイツ語では“singspiel（ジングシュピール）”、日本語に訳せば「歌芝居」（“sing”は「歌」、後ろの“spiel”は英語ならば“play”。ちなみに、楽器を演奏するときなどは動詞型の

“spielen”の語を用います）という少し違ったジャンルの名称が冠されていました。

しかし、普通の人にも分かる言葉で書かれているとはいえ、筋立てが支離滅裂、あるいは「木に竹を接いだ」など散々な評価がなされるような代物で、モーツァルトの音楽との mismatch は甚だしいものと言えます。

こうした悪条件が重なっていたにもかかわらず、現在に至るまで世界各地の歌劇場で取り上げられる演目として生き永らえているのは、ひとえにモーツァルトの音楽の力と言えます。作品全体を通してあふれ出てくる美しいメロディ、そして人間の感情の揺れ動き、人間関係の機微などをそのまま音にしたような繊細さと精妙さ。モーツァルトは、この作品の完成わずか3ヶ月後、35歳でこの世を去ります。人生の最後の時期に彼が到達した高みを評するには、いくら言葉を積み重ねても追いつかないでしょう（弦楽五重奏曲ト短調 KV. 516 の冒頭をめぐって、スタンダードとゲオンの言葉を引いて「モーツァルトのかなしさは疾走する。涙は追いつけない」といったのは小林秀雄ですが）。

さて、この作品を語る上で、もう一つ欠かすことができないものがフリーメイソンとの関係でしょう。フリーメイソンとは、「自由石大工組合」の名の通り、中世の城や宮殿の建設に携わる石大工たちが自ら厳しい戒律を

定め集った結社で、巷間言われるところ、密教的な性格を持つ組織とされています。ただし、その実態の詳しいところは現在でもまだよく分かっていません。17世紀以降には石大工以外の人々も参加するようになりました。モーツァルトは1784年12月に入会し、「魔笛」の作曲を依頼したシカネーダー、そして、かのゲーテやハイドンもメンバーであったとされています。

モーツァルトはフリーメイソンの教義や儀式を寓意する要素を「魔笛」の中に織り込んだといわれています。楽曲と宗教性との関係は、序曲の楽器編成にある楽器が組み込まれていることから推し量ることができます。「ある楽器」とはトロンボーンです。当時、トロンボーンは神聖なるものとの結びつきを示す宗教的な楽器ととらえられていました。モーツァルトは、交響曲や協奏曲ではトロンボーンを

使いませんでしたし、彼の歌劇の序曲でトロンボーンが使われているのは「魔笛」だけです。それに対して、宗教作品では10代の頃からトロンボーンを用いており、遺作となった「レクイエム」ではトロンボーンのソロが盛り込まれています。

序曲はアダージョとアレグロの2つの部分から構成されています。冒頭、フリーメイソンの典礼に関係するとされる変ホ長調の荘重な和音が3回、全管弦楽によって奏されます。アレグロの部分は、ソナタ形式で、1つのテーマを中心に対位法的な書法で書かれています。中間部で、再び、フリーメイソンの和音が3回（このときは変ロ長調）奏されます。アレグロに戻り、彩りを変えながら一気に呵成に曲を閉じます。（演奏時間：約7分）

W. A. モーツァルト

ヴァイオリン協奏曲第4番 ニ長調 KV.218

モーツァルトのヴァイオリン協奏曲で「真作」とされているものは全部で5曲あります。「第6番」「第7番」という番号がついた作品が演奏されたり、録音されたりすることがありますが、これらは他の作曲家の手になる「偽作」とされています。

全5曲のうち、1773年に作曲されたとされる第1番KV.207以外は、1775年、彼が19歳の時に集中的に作曲されました。

このような短期間に作曲されたのはなぜでしょうか？

ひとつには、モーツァルトがコンサートマスターを務めていたザルツブルグの宮廷オーケストラで演奏する

ためといわれています。モーツァルトは、名ヴァイオリニストであった父の薫陶の元、ヴァイオリンの演奏技術を磨き、わずか13歳（1769年）でコンサートマスターに就任するほどの腕前をもっていました。ですので、ソロは彼自身、あるいは父レオポルドが受け持ったのではないかとされています。

同時に、第3番KV.216（9月12日）、第4番KV.218（10月12日）、第5番KV.219（12月20日）の3曲を「セット」として楽譜の販売を考えていたのではないかという説もあります。その根拠として、当時は、3曲、6曲、12曲セットということが多かったこと

(少し時代は前になりますが、有名なヴィヴァルディの「四季」は『和声と創意の試み』作品8の全12曲のうち最初の4曲です。ほかにも『調和の靈感』作品3やヘンデルの合奏協奏曲集などが12曲、あるいは6曲セットです)、そして、第3番から順に、ト長調、ニ長調、イ長調という調性関係(属調)にあることなどがあげられます。

現在、第3番から第5番の3曲は優れた作品として(モーツァルトの研究者アインシュタインが「この(第2番と第3番の)間に何が起こったのだろう」と嘆じたほどです)、ヴァイオリニストにとって貴重なレパートリーとなっています。

しかし、モーツァルトは、ヴァイオリン協奏曲のために再び筆を執ることはありませんでした。凡庸なイタリア人ヴァイオリニスト・ブルネッティがモーツァルトに代わって宮廷音楽監督兼コンサートマスターとして雇われたことが彼の自尊心をいたく傷つけたからという説があります。また、別の説では、モーツァルトはピアノをこそ「自分の楽器」と見定め、これ以後はピアノという楽器の可能性を探ることと自らの音楽の発展とを結びつけるようになったからといわれています。

ともあれ、弦楽器奏者である解説者としては、モーツァルトは「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲」、セレナーデ(「ハフナー」など)やディヴェルティメントにおける協奏的楽章、そして、後期の交響曲群や弦楽四重奏曲などの作品でヴァイオリンに数多くの名旋律を与えてくれましたが、後期のピアノ協奏曲群で描いた

多様で深淵な世界をヴァイオリン協奏曲のジャンルでも残してくれたならば、という儚い想いを禁じ得ません。

第1楽章 Allegro 4/4 拍子 ニ長調 ソナタ形式

この作品の「軍隊」というニックネームは、オーケストラ、そしてソロが冒頭で奏でるテーマが行進曲風で、どこか軍隊ラッパを思わせることからつけられました。長調と短調がごく自然に交錯し、音楽の色合いを瞬時に変えながら進んでいきます。

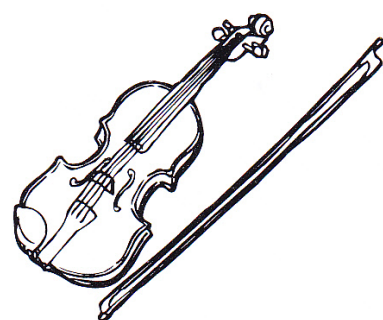
第2楽章 Andante cantabile イ長調 3/4 拍子

オーケストラによって提示された主題をソロがあらためて奏でます。牧歌(パストラレ)風の雰囲気の中でゆったりとたゆたうように音楽が紡がれていきます。

第3楽章 Rondeau; Andante grazioso ニ長調 3/4 拍子—Allegro ma non troppo イ長調 6/8 拍子

ゆったりとした開始から、ほどなくしてアレグロの生き生きと飛び跳ねるような音楽へ。中間部では、俗謡調のメロディと一番低いGの開放弦を持続低音として同時に鳴らす奏法が独特の雰囲気を醸し出します。再び、冒頭の形に戻り、最後はフェイド・アウトするように静かに曲を閉じます。

(演奏時間：約25分)



P. I. チャイコフスキー (1840~93) 交響曲第5番 ホ短調 作品64

チャイコフスキーが生きた時代のロシアという国の状況をいくつかのトピックから見ていきましょう。

1812年、ナポレオン率いるフランス軍に侵攻され大損害を負いながらもこれを撃退し、戦後はフィンランドやポーランド立憲王国を支配して、神聖同盟の一員としてウィーン体制を維持する欧州の大国となりました。そして、19世紀後半になると、南下政策によりトルコ等周辺国との衝突を繰り返し、イギリスとの対立が激化し、1853年10月に始まるクリミア戦争へと突入していきます。互いに消耗戦が繰り返される中、ロシアではニコライ1世が崩御し、1855年、新たにアレクサンドル2世が即位し、和平交渉が進められます。アレクサンドル2世は、1861年、農奴解放令を發布し、近代的改革への道を開いたとされますが、前近代的なものとの相克の中で実際の改革（農業近代化や工業化など）のテンポは遅いものでした。ナロードニキ（人民主義者）による農村啓蒙運動も政府の弾圧を受ける中、こうした支配体制への不満が募り、急進化した無政府主義者によって、1881年、皇帝は暗殺されます。

ちょっと世界史の教科書風になってしまい失礼しました。要するに、激動する政治・社会の中で前近代的な体制を残しながら「近代化」が進行する時代に彼は生を受けていたということです（これを言うための「前振り」が長すぎましたか？）。

キーワードとしての「近代化」ということでいえば、チャイコフスキーは、ロシアにおいて「音楽学校」という制

度化された音楽教育の枠組みの中で作曲家も輩出される時代の流れの分水嶺、ないしは、その嚆矢に位置づく作曲家ということができるでしょう。彼は、帝室法律学校に学び法務省に勤務していましたが、1861年秋、帝室ロシア音楽協会（ROM）の門をたたき、翌62年にROMがロシア初の音楽院、ペテルブルグ音楽院に改組されるとすぐさま入学し、そこで作曲技法を学び作曲家への道を歩み始めます。同じ時代のロシアの作曲家、とくに「ロシア五人組」と比べてみますと、ボロディン（1833年生）は化学を専攻し、リムスキー＝コルサコフ（1844年生）は海軍兵学校に学び、キュイ（1835年生）は堡塁建築の専門家など別の専門領域を持っており、音楽理論は「ロシア五人組」の統括者といわれるバラキレフ（1837年生）からの個人教授、あるいは独学という形で修得されました（さて、ここで問題。「ロシア五人組」の残りの一人は誰でしょう？ヒントは、後でも名前の出てくる指揮者レオポルド・ストコフスキーが出演したディズニー映画『ファンタジア』（1940年）でも取り上げられたある作品の作曲者です。答えは最後の方にありますが、途中、読み飛ばさないでくださいね）。

「近代化」を象徴するもう一つのものとしては、交通手段の発達（たとえば、蒸気機関車）、そして、それに伴う旅の範囲の拡大があるでしょう。「旅人モーツァルト」というフレーズもありますが、危険と隣り合わせであったモーツァルトの時代と比べると、さまざまな意味で旅の可能性が

広がりました。チャイコフスキーはヨーロッパの各国・地域はむろんのこと、1891年には大西洋を越えてニューヨークのミュージック・ホール(のちの、カーネギーホール)のこけら落としに自作を指揮する演奏会のために招かれています。異国の文化と人々にふれる旅は、彼に多くの刺激を与えたといえるでしょうし、交響曲第5番はまさにそうした中から生まれた作品の典型であると言えます。

チャイコフスキーにとって、番号付の交響曲としては第4番(1877年)から11年の開きがあります(ただし、この間に、交響曲「マンフレッド」(1885年)が作られています)。とくに1881年以降、交響樂的作品として世に「傑作」と評価される作品を書き得ていませんでした。その意味で、彼にとって「スランプ」の時期ともいわれます(彼自身は「組曲第3番」(1884年)を好んで指揮していたという事実もあります)。

そうした時期の1888年1月から3月にかけて、ライプツィヒ、ハンブルグ、ベルリン、プラハ、パリ、ロンドンに演奏旅行に出かけ、ブラームス、グリーグ、グノー、マスネ、フォーレ、ドヴォルザークらと会う機会を得ました。こうした中でミューズの神の微笑みがあったのでしょうか、弟モデストへの手紙(3月28日付)にも「夏に交響曲を書くつもり」としたためたように、交響曲作曲への意欲を掻き立てられます。帰国後間もない1888年6月頃から作曲に取りかかり、8月26日に完成しました。

1888年11月17日、ペテルブルグでの初演は聴衆には温かく迎えられましたが、批評家たちからの評価はあま

り芳しいものではありませんでした。第一の原因は彼の指揮の技量の問題であったとされています(彼は自分の指揮には自信を持っていませんでした)。そんなこともあり、彼に対してさまざまな援助の手をさしのべたことで有名なフォン・メック夫人に宛てた手紙で「失敗作」と切り捨てるほど低い自己評価をしていました。

しかし、その1年後のハンブルグでの演奏会では、オーケストラの団員たちがリハーサルの時から高い評価をしており、聴衆も賞賛の声を惜しみませんでした。1892年には大指揮者ニキッシュがペテルブルグの演奏会で取り上げ評価を一変させる名演を遂げました。こうしたことを通して、彼自身もこの作品の価値を認めるようになってきました。

その後、現在に至るまでの間に、この曲はたいへんポピュラーなものになり、オーケストラにとっては欠かすことのできないレパートリーになっています。ある年代以上の方々は、映画『オーケストラの少女』(1937年)で指揮者のストコフスキーが当時の手兵フィラデルフィア管弦楽団と演奏したシーンを思い出されるのではないのでしょうか。

第1楽章 Andante ホ短調 4/4 拍子—Allegro con anima ホ短調 6/8 拍子

第1楽章について次のようなメモが残されています。「序奏。宿命の前の、すなわち神の摂理の信じられないほどの予定性の前に起こる完全な諦めの念。アレグロ。①・・・に対するつぶやき、疑念、不平と非難。②信仰の抱擁の中に身を投げるべきか?」。最終

的にこの言葉は削られました。が、チャイコフスキーのこの交響曲への想いの一端を理解する上でのひとつの道しるべとなるでしょう。

冒頭、クラリネットで奏される「運命主題」が全曲を通して現れるという循環的な取り扱いをすることによって全曲の統一をはかっています。これをベートーヴェンの「運命」交響曲のように「苦悩から勝利へ」ととらえるか、所詮神の示した運命に抗うことはできない（孫悟空風にいえば「お釈迦様の掌の上」）と読み取るか等々、解釈がさまざまに分かれるところだと思えますが、そうした解釈の多様性を許容する幅広さをもった作品といえるでしょう。

主部に入ると、ポーランド民謡から採られたといわれる第1主題、ロ短調の第2主題、そして、彼ならではの抒情的な副次主題が交錯して音楽は進んでいきます。

第2楽章 Andante cantabile, con alcuna licenza ニ長調 12/8 拍子

弦楽器の和音の上に深々とした音色のホルン・ソロによって奏でられるメロディ。チャイコフスキーは数え切れないほどの美しいメロディを書き残しましたが、その中でも屈指のものといえると思えます。広大なロシアの大地が眼前に広がるかのような錯覚を憶えるのは解説子だけではないでしょう。このメロディは、チェロ、ヴァイオリン、木管へと受け継がれるとともに、他の楽想と絡み合いながら音楽は展開していきます。

ここで、私たちオーケストラのメンバーでもふだん目にしない“con alcuna licenza (コン・アルクーナ・リチェンツァ)”というイタリア語の

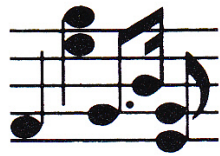
表記について一言。意味としては「ある程度の自由さをもって」となります。一つひとつの単語を見ていきますと、“con”は「～をもって」（英語では“with”）、“alcuna”は「いくらかの」の意です。最後の“licenza”は「許可」（英語で言えば“license（ライセンス）”）という意味の他に「休暇」「わがまま」などの意味があります。演奏の際の指示としては「自由に演奏することを認める」という意味で使われています。

第3楽章 Valse, Allegro moderato イ長調 3/4 拍子

優雅なワルツ（“Valse”はフランス語でワルツの意味です。チャイコフスキーはフランス語をもっとも得意としていました）。中間部で、弦楽器と木管楽器との細かなパッセージのやりとりがあります。再び、冒頭のワルツの主題に戻り、コーダの部分で「運命主題」が現れます。

第4楽章 Finale, Andante maestoso ホ長調 4/4 拍子—Allegro vivace ホ短調 2/2 拍子

冒頭から58小節までの序奏は「運命主題」そのものですが、ここでは長調に変わり、“maestoso”という表情記号も付され、第1楽章の冒頭とはだいぶ異なった印象を与えます。主部は、弦楽器によって提示されるホ短調の主題と金管楽器によって高らかに奏される主題、この二つの主題が絡み合いながら音楽は進行していきます。ファンファーレ風の盛り上がりを見せた後、フェルマータでの一瞬の間。コーダに入り、あらためて「運命主題」が高らかに奏され、最後の展開をして曲を閉じます。（演奏時間：約45分）



ところで、みなさんは、チャイコフスキーの第5交響曲の中で、オーケストラにとってもっとも「鬼門」といえる箇所はどこだと思われますか？

「冒頭のクラリネット・ソロ！」「第2楽章のホルン・ソロ！」「第2楽章のテンポが揺れる中で3連符の動きと4連符の動きをうまく合わせること！」

「第3楽章の弦楽器と木管楽器の細かなパッセージ！」「第4楽章の最後まで金管の体力が持つかどうか！」等々、いろいろなご意見が出てくるのではないのでしょうか。それらどれもが当たっているといえれば当たっています。たしかに、技術的に難しかったり、心臓がバクバクして破裂するほどの緊張感をもつような箇所ですから。

でも、ここで「正解」とするのは、第4楽章のコーダの前です。

どうしてですか？

コーダの前の部分で曲全体が終わってしまう感じがするので、お客さんが一斉に拍手をしてしまう危険性が高いからです。このこと自体は音楽とはあまり関係ありませんが、実際のところ、この部分でのフェルマータという「無音」状態の「間」のさばき方は非常に難しいものです。

ちなみに、この問題を重々承知しながら、あっけらかんと処理してしまったのは、前に名前を挙げましたストコフスキーです。彼はフェルマータの指

示を無視して（カットして）コーダへと突入する形を取りました。その演奏は録音として残され、CDで聞くことができます。さて、ストコフスキーの名前が再度出てきたところで、先ほどの問題の答えです。「ロシア五人組」の残る一人とは「展覧会の絵」で有名なムソルグスキーでした。『ファンタジア』では「はげ山の一夜」が取り上げられました。

話のついでといっっては何ですが、楽章と楽章の間で拍手が起こっても不思議はないわけです。ただ、日本では、いつの間にか最後まで聴き通すことが「お作法」のようになってしまっているように思われます。ときには「シッ！」といって拍手を遮ろうとすることすらあります。つまりは、「失礼なこと」「ものを知らない人がやること」などといった否定的な言説や考え方がはびこっているのではないのでしょうか。しかし、世界でもっとも観客の質が高いといわれるベルリン・フィルの定期演奏会でも楽章間で拍手がわき起こることがあります。それは、演奏に対する聴衆の率直な評価を表わしているといえます。

話を元に戻しまして…

そういうわけで、楽章間で拍手をすることは十分にあり得ることと思っ
ていますが、第4楽章のこの部分では
ご勘弁下さい。

そして、本当に大団円を迎えましたら
盛大な拍手をお願いいたします。

えっ！？「演奏が良ければ」ですつ
て…。

それはそうですね。

団員一同、がんばります！